

よりよく生きる

心温まるお話をひとつ紹介します。

【夏の日のヒーロー】

ある年の夏。私は5歳の息子連れ、自然博物館で開かれていた昆虫展へ向かっていました。ムシキングの影響もあり、息子はこの日を心待ちにしていました。博物館まであと数キロ、渋滞の最後尾に差し掛かり、車を止めたその瞬間、背後から激しい衝撃が走りました。大型トラックに追突されたのです。何が起こったのか理解できないまま、真っ先に助手席の息子を見ました。けれど、そこに姿がありません。息子の名を叫ぶと、足元から「痛い」というか細い声。息子は衝撃でシートからずり落ち、助手席の足元で挟まれていました。胸が締めつけられ、半狂乱になりながら助けようと身を乗り出したその時、自分の両足も挟まれて動けないことに気付きました。私はただ叫ぶしかありませんでした。追突から1、2分後、突然、変形した運転席側のドアがこじ開けられました。緑色のヘルメットに迷彩服。数人の自衛隊員が、そこに立っていました。

「足が挟まれています！」

そう叫ぶ私に、彼らは無言でバールのような工具を使い、運転席をこじ開けて後方へずらし、私を救い出してくれました。

「息子が助手席の足元に挟まれています！助けてください！」

私の必死の声に、若い隊員が助手席に潜り込み、シートを外しながら他の隊員に指示を飛ばします。その声は力強く必死で、それでいて不思議と安心感がありました。数分後、私には永遠にも感じられた時間の後、息子は車体の外へと引き出されました。その後、息子は救急隊員に引き渡され、私は両足の痛みで立てないながらも、お礼だけは言いたくて隊員のもとへ這うようにして近付きました。

「本当に、ありがとうございました！」

隊員は微笑み、

「当たり前のことをしただけです。命が無事でよかった。」

と言いました。その時、私は彼の右肩が黒く濡れていることに気付きました。

「怪我をされているんじゃないですか？」

「え？ああ、潜ったときにちょっと刺さったみたいです。」

そう言いながら体をひねると、背中全体が血で濡れていました。どう考えても大量出血です。それでも彼は「ちょっと痛いだけ」と笑いました。救急車で搬送された後、息子は両足骨折、私は右足骨折。治療後、息子のベッドに寄り添い、「よく泣かなかったね、頑張ったね」と声を掛けると、息子はこう言いました。

「お兄ちゃんが笑ってたから泣かなかったよ。クワガタの話もしたんだ。」

彼は救助中、息子とムシキングやクワガタの話をしてくれたそうです。だから息子は安心し、痛みをこらえることができた…。そのことを知った瞬間、私は涙をこぼしました…。

